

徳山教会 四旬節黙想会『パウロの回心』2020年3月1日

カルロ・マリア・マルティーニ著 今道瑤子訳 女子パウロ会 1990年（ミラノの教区司祭向けの黙想）

第1講話 10:40～11:30

黙想会のテーマ・導入

パウロが殉教した場所と伝えられているのは、ローマのトレ・フォンターネ（3つの泉）です。そこには人を沈黙に誘う雰囲気があります。3つの泉と呼ばれるゆえんは「パウロが殉教したとき、はねられた首が3回弾んで、跳ね落ちた跡から3つの泉が湧き出た」という言い伝えを記念するためです。ローマにいる頃、私(カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿)はそこを何度も訪ねました。特に、霊的な闇や混乱に陥った時に行きました。マントを剥がされ、兵士たちに縛られたパウロが人生の終わりの時に何を思ったか？ 想像しようと思いました。パウロは、熱心に律法を守った時期、ダマスコの出来事、気落ちした時の孤独、砂漠で過ごした14年、共同体から排斥されたかのように感じられた時、バルナバやペトロとの口論、数々の苦難をどう回想したのでしょうか？ 宣教活動での喜び、したためた長い手紙の数々・・・をどのように追想したのでしょうか？ 死を目の前にして、隠し事が何もできなくなったパウロに、本当に価値あるものと映ったものは何だったのでしょうか？ パウロの人生に「神のあわれみ」はどのように働いたのでしょうか？ 人生の最後、使徒職を回想しているパウロと一緒に黙想できたらと、何度も思いました。

よく知られている「ダマスコの回心の経験」は、一過性のものではなく、そのあとの長い歳月を経てだんだんと深いレベルで理解する、とても奥行きのある驚天動地の事件でした。私たちにとっても、同じようなことが言えるでしょう。回心のはじめになる洗礼、修道誓願、司祭叙階という出来事は、常識を超える出来事ですから、その後続く回心を経て少しずつ深めることになります。

洗礼の恵み、修道会の入会、誓願、叙階の恵み・・・その時が恵みのピークにならないようにしましょう。この黙想会で神の私への計画を悟る恵みを願いましょう。

1. ダマスコの途上で

もし私たちが殉教を目の前に心を整えているパウロに「あなたの人生にとって何が決定的だったのですか？」と質問したら「ダマスコのイエスとの出会い」と答えるに違いありません。パウロの生涯にあの出来事が刻まれています。パウロにとっては、すべてそこから始まりました。しかし、私たちがダマスコの出来事を理解するのは容易ではありません。彼も人生の終わりになって理解したでしょう。 私たちにとっての洗礼・修道誓願・司祭叙階の意味も人生の終わりに理解するのでしよう。私たちにダマスコの出来事の全体を理解するのは難しいとしても、前と後では決定的に違います。

誤ったいくつかの解釈

1. まずこの出来事について私たちが抱きやすい間違った観念を取り除くことから始めましょう。この物語に関するたいていの芸術作品は、馬と落馬したパウロと光を描いています。これは、誤解につながりやすい作品です。人間に働く神の計画を理解する妨げになります。「罪びとだったパウロが、自分の悪に気づき生き方を改めた」という理解はダマスコの出来事の本質を見誤っています。パウロは、ダマスコの事件で掲げる旗（ファリサイ派からキリスト者）を変えたに過ぎない、と理

解してはいけません。律法遵守に熱心だった男が、キリストという新しい旗のもので奉仕するようになった、という次元の話ではありません。もし私たちがこの程度の理解しかしないなら、神の働きを過小評価することになります。

2. パウロは自分からは「回心」という言葉を一度も使っていません。パウロに起きた出来事の多くを私たちはまだ理解していません。あの事件を単純なカテゴリーにくくってはいけません。「回心」という言葉は典型的な聖書用語で、旧約では「帰る」という原意のある「シューブ」というヘブライ語が使われます。「回心」は、一定の方角に進んでいくうちに、ある時点で行き詰まり、後戻りする動きです。

新約では、2つの動詞で表現されます。マルコ1:15の「時は満ち、神の国は近づいた。回心して福音を信じなさい」では「メタノエイテ」、使徒書2:19の「自分の罪が消し去られるように、悔い改めて（メタノエーサテ）立ち帰りなさい（エピストレスプサテ）」とあります。真意は「メンタリテイを変える」「帰ること」です。痛悔して起きた心の変化、償いの行為、も含まれます。

パウロがダマスコの出来事を「回心=悔い改め」あるいは「立ち帰る」という言葉で描写しないのを私たちは不思議に思います。彼は「メタノエイン（悔い改める）」と「エピストレフェイン（立ち帰る）」という用語で定義できるような行為をダマスコで経験したとは言いません。

パウロは、何が「回心」かよく知っていたし、自分の体験が回心の特徴を備えていることもわかっていました。しかし、ダマスコの体験はそれよりはるかに偉大で奥行きが深いものでした。

ダマスコの秘義

回心について狭い理解を退けたのでパウロがどのようにダマスコの事件を描いたか考察します。

驚くのは、彼がダマスコについてあまり書いていないことです。この事件は、パウロにとって根本的なことなのに、ほとんど黙しています。パウロにとってダマスコの事件を語るよりも、それを自分の生涯にどう統合していくかがテーマでした。

パウロがダマスコの事件について語る記録を見ましょう。

1. ガラテヤ（1:15~16）「啓示された」

「しかし、私を母の胎内にある時から選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、み心のままに、御子を私に示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた時・・・」

「選び分け」・・・「召し出し」・・・「示」・・・「告げ知らせ」。イエスが主語の4つの動詞です。そのうち、回心に直接触れるのは「示」だけです。ダマスコの事件の本質は、神の御子が彼に自らを「啓示し」（ギリシア語でエン・アウトー）、彼を派遣したことから描かれています。

2. I コリ 15 : 8~9 「あらわれた」

「そして最後に、月足らずで生まれたような私にもあらわれました。私は、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。」

教会を迫害していたパウロにとってダマスコの出来事は「ふさわしくない自分に」主があらわれてくださったこととしか表現できませんでした。倫理的な回心の要素は含まれていますが、事件の核心は主イエスがあらわれたことです。

3. フィリピ 3 : 4~9 「キリスト以外に執着しない」

「とはいえ、肉の頼みなら、私にもあります。肉を頼みとしようと思う人がいるなら、私はなおさらのことです。私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義に関しては非の打ちどころのない者でした。しかし、私にとって利益であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、私の主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらを今は屑と考えています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。私には、律法による自分の義ではなく、キリストの真実による義、その真実に基づいて神から与えられる義があります。」

出来事そのものについては触れていませんが、それをどう生きたか述べる大切な箇所です。ダマスコの事件の前と後の違いは、キリスト以外の何かに執着しているか、新しくキリストを所有して貧しくなったか、の問題でした。「私にとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすようになったのです。」パウロの中では価値観が一新されました。キリストを知ることが絶対的優位を占めるようになりました。

4. II コリント 4 : 6 「心に輝きを得る」

「『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、私たちの心のうちに輝いて、イエス・キリストのみ顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」

ここでは全ての使徒について書かれていますが、ダマスコの出来事に当てはめると迫力があります。創造主である神が、パウロの心に輝き、彼を照らして、キリストの富といのちを彼に悟らせたのです。

5. I テモテ 1 : 12~13a 「キリストから使命を受ける」

「私を強くしてくださった、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、私を忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです。以前、私は神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。」

このテキストは、神の招きの不思議さを感じさせます。「この方が」と、パウロははっきりとイエスと出会っています。「この方」から、使命を受けたと語っています。

パウロはダマスコの体験をまとめてこう語っています。

6. I テモテ 1：13b～16 「あわれみを受け模範となること」

「信じていない時に知らずに行った事なので、あわれみを受けました。私たちの主の恵みが、キリスト・イエスにある信仰と愛と共に満ち溢れたのです。「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、すべて受け入れるに値します。私は、その罪人の頭です。しかし、私が憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまず私に限りない寛容をお示しになり、この方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。

このように、ダマスコの出来事は、一言で「回心」と表現できない、奥行き深い秘義なのです。

ダマスコの出来事は、倫理的な回心とかメンタリティの変化というよりずっと複雑なことです。とても奥が深いので謙遜にこの体験に近づく必要があります。ほんの少ししか理解できないことを自覚しましょう。また、神によって次の恵みをいただけることを信じましょう。そうすれば、私達も生涯にわたって回心を深められます。

私たち自身への問い

「私はいつ回心したのか？」という問いに答えてみましょう。私の生涯には、ある出来事が「回心」となり、その前と後とでは変わったことがあるでしょう。あるいは、神と人・教会に奉仕する中で、新しい理解を得た出来事があるのでしょうか？

キリスト者としての本質的なメンタリティの転換を一度も体験していないなら「回心」をしていないのです。パウロの回心の歩みを思いながら、自分に起きた出来事を振り返りましょう。

主よ、私の道を教えてください。パウロのように、私も私の過去に出発点を置けますように。あなたのご計画のプロセスで色々な区切りがありました。光の時、陰や試練の時、忍耐の時……。今の私の歩みは、どの位置に立っているのでしょうか？ 私はどこに進んでいるのでしょうか？ それを知る恵みをお与えください。

私の場合 サラリーマンを10年以上続け、難しい仕事をし終えた後、何度か「あなたの仕事は他にある」という声を聞きました。限界まで仕事してないと聞こえない声だったと思います。当時、全身全霊を打ち込む仕事が“祈り”でした。その声は神からの呼びかけだったのでしょうか。「自分の将来どうするのか？」仕事を続けながら問い続けました。この仕事を続けて、地位や収入が多少得られたとしても・・・司祭への道を選ぶよう導かれました。家族の反対はありましたが、神からの招きと信じて歩んでいます。

振り返りの質問

Q. 私の「回心」と呼べる出来事があるでしょうか？ イエスと出会った、呼びかけられたと感じた体験はあるでしょうか？ その前と後とでは、自分は変わった、と言える出来事があるでしょうか？

2. イエスを知ること

使徒パウロ、私たちはあなたの生涯の秘義に分け入ろうとしています。神があなたに行われたことを通して、神(イエス)を知り、神(イエス)がどのような方なのか知りたいからです。

今、私たちはあなた(パウロ)の苦しみとあなたの殉教を思いながら祈ります。主があなたの目を開いてくださったように、私たちの目を開いてください。回心の前にあなたがどのような者だったか？ また、神が私たちをお呼びになる前、私たちがどのような者だったか理解する恵みをお与えください。私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。

すでに引用したテキストに加え、使徒書の3つのテキストを見ます。

使徒行伝 26：9～11 は、自叙伝の要素が強いテキストです。パウロがカイサリアの法廷でアグリッパ王の前で行った最後の弁明です。

「実は、私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。そして、それをエルサレムで実行に移し、この私が祭司長たちから権限を受けて多くの聖なる者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしたのです。また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒瀆するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」

歴史家たちは「外国の町にまでも」ということに越権行為では？と首を傾げていますが、パウロはきっと紹介状をもらい、他の人たちをはるかに超える熱心さで、キリスト者たちを迫害しようとダマスコに向かったのでしょう。彼は、自分が正しいと思うことを実行する際、創意工夫の豊かな人でした。

使徒行伝 26：12～13

「こうして私は祭司長たちから権限を委任されて、ダマスコに向かったのですが、途中、真昼のことです。主よ、私は天からの光を見たのです。それは太陽よりも明るく輝いて、私とまた同行していた者と周りを照らしました。」

「天からの光」という言葉に注意を払う必要があります。パウロはこの点を人生で何度も思いめぐらしています。パウロにとって、「天からの光」は前触れなし、青天の霹靂でした。敵対する側から呼ばれました。まさに驚天動地の出来事でした。

Ⅱコリ 4：6

「『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、私たちの心のうちに輝いて、イエス・キリストのみ顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」

あらゆる光を造られた創造主が、さらに偉大な光をもってパウロにご自身をあらわされたのです。パウロは、旧約に記されている神の偉大な創造の業を、自分に起きた出来事と関連づけています。神の啓示の光の前には、他の一切が色あせて見えるのでした。

使徒書 26：14～18

私たちが皆地に倒れたとき、『サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか。突き棒を蹴ると痛い目に遭うものだ』と、私にヘブライ語で語りかける声を聞きました。そこで、私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『私は、あなたが迫害しているイエスである。起き上がれ。自分の足で立て。私があなたに現れたのは、あなたが私を見たこと、そして、これから私が示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。私は、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らが私への信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に相続にあずかるようになるためである。』」

パウロに幾つか質問してみましよう。

Q.あなたにイエスのみ言葉が掛けられた時、あなたはどのような状態でしたか？

この問いへの答えは、自叙伝的性格があるフィリピの手紙にあります。

フィリピ 3：4～6

「肉にも頼ろうと思えば、私は頼れなくはない。誰か他に、肉に頼れると思う人がいるなら、私はなおさらのことです。私は生まれて8日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ち所がない者でした。」

パウロは、イエスが自分を捕らえたのは、人生で最も大事なものをしっかり握っていた時だったと述べています。人生をつぎ込んであらゆる努力をして欲しいものを手に入れた時です。「私はなおさらのことです」という言葉でわかるように、栄光を得るためにパウロは全てを注ぎました。

「生まれて8日目に割礼を受け」とは、呪われた者、見捨てられた者ではなく、無割礼の者と軽蔑されていた異邦人のようではないことです。

「イスラエルの民に属し」とは、選ばれた民、異邦人の光である民の一員であること。

「ベニヤミン族の出身」とは、自分の祖先を知っている、私の系図はヤコブの子まで遡れること。

「ヘブライ人の中のヘブライ人」とは、父・母・祖母など皆、この栄光ある系図に属していること。

「律法に関してはファリサイ派の一員」とは、律法に厳格なヘブライ人、倫理的に最も厳格で、人よりも律法に精通してユダヤ教の深い霊性を生きていること。

「熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ち所がない者」とは、マリアの夫ヨセフに与えられた「正しい人」という賞賛の言葉と同じです。聖書的な立場から最高の賛辞をパウロは自分に当てはめています。

パウロがキリストに捕らえられたのは、系図・正義感・熱意・誇りなど、彼にとってとても大切な宝を持っている時でした。パウロは感動を込めてそれらを列挙しています。

自分の出身家系・伝統は、自分の本性のように体に入り込んでいます。その典型的な例は、フランスの女性哲学者シモーヌ・ヴェイユです。彼女は、洗礼と聖体、祈りについて深い洞察に達していました。キリスト教の生活、労働、観想について記されたとても美しい内容を数多く残しました。けれども、彼女は洗礼を受けませんでした。ヘブライ人という彼女のあり方を放棄できなかったのです。聖体の素晴らしさに憧れ、聖体に養われることを恋い焦がれながら、自分の民族と連帯するために洗礼に踏み切れませんでした。

パウロは、神の前で正しい人、最高の賛辞を与えられるべき人と自負していたし、それら全ては絶対に手放さない宝と信じていました。回心前のパウロはねたみ深く、熱心にこれらのものを守ろうとし、この宝を脅かす危険のある一切のものに対して激しく抵抗し暴力も辞しませんでした。

こうなると I テモテ 1：13a にある彼の自己批判を理解できます。

「以前、私は神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。」 神に対して冒瀆を吐くという意味ではなく、自分の宝を守るため、それと知らず、神の子キリストに反対した、という意味です。「それと知らずに」ということにパウロの回心の根幹があります。パウロが生きた悲劇があります。

パウロは、善の創り主としての神を認めず、自分が大事にする宝をすべての中心に置いていました。 外面的には非の打ち所がなくても、内面的には父である創造主の神との関わりが崩れ、欲深さに染まっていたのです。パウロは、時間が経つにつれますそのことに気づいていきます。自分の半生が罪に生きていたことを悟ります。間違いに気づき、パウロに新しい福音理解、恩恵・あわれみの理解、神のイニシアティブ（主導権）・神の働きの理解が生まれます。

パウロは、自分が貧しい人間に過ぎないこと、人から注目される偉い人ではなく、神のいつくしみによって恵みを受けた者に過ぎないことを悟ります。 恵みの福音を理解するようになります。

回心前のパウロのように、自分に服従させる対象としてしか他者を理解しない思想的暴力は、私たちの時代にも消滅していません。パウロは、かなり重大な脱線の例です。イエスが福音の中で「罪びとたちの方が、お前たちよりも先に神の国に入る」と言われた例に相当するでしょう。酔っ払いなどは確かに罪を犯しますが、悪いことをしていることを少しは自覚しています。弱さを克服するために、人の助けやあわれみを必要としています。しかしパウロはその反対で、自分が弱いとか、もろいという自覚はありませんでした。イエスがファリサイ派を責めた「罪」をパウロは背負っていました。自分の立場を守るためならどんな暴力も辞さないほど、道を踏み外した、根本的な心得違いをパウロは犯していました。

Q.主はあなたをどの方向に導かれたのですか？

フィリピ書とガラテア書にどう導かれたのかパウロ自身書いています。主は、以前彼が大切にしていたものから離脱するように導かれました。

A フィリピ3：7～9

しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。

キリストを前にして、これまでパウロが大事にしていたものが一顧に値しないことに気づかせてもらいました。それ自身に価値がない、ということではなく、キリストを前にしては、ということです。主は、物事の見方を全く新しくしてくださいました。倫理的価値の変化ではなく、ある照らしへとパウロを導きました。キリストの視点に立ち、以前と違う見方をするように変化しました。自分の義を誇っていたけれど、人々を断罪する者になり下がっていたことを自覚します。「なぜ、私を迫害するのか？」というイエスの問いに、とんだ履き違いをしていた、全てをやり直さないといけない、と悟りました。

B ガラテア 1：15～17

しかし、母の胎にいるときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子を私に示して、異邦人に御子を告げ知らせるようにされた時、私は、人に相談することはせず、また、私よりも先に使徒となった人たちがいるエルサレムへ上ることもせず、直ちにアラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻ったのです。

「どの方向に」については、上記に答えがあります。パウロに使命が委ねられます。イエスは「まったくお前は間違っている」と言われ、パウロに過ちを認めさせると同時に「すべてをお前に委ねよう」「お前を派遣しよう」とも言ってくださいました。2つのことが同時に言われたことは、パウロには驚きでした。神は、履き違いを正すと同時に、自分に仕えるように呼んでくださる方です。間違っていたにもかかわらず信頼してくださる方です。このことは、ペトロの召し出しについても、私たちの召し出しについても言えます。

Q.この変化はどのようにして起こったのか？

何がパウロに啓示されたのでしょうか？ なぜパウロは回心についてより啓示について話すのでしょうか？ 全てがパウロに無償で与えられたからです。彼が努力で得た訳ではありません。私たちが神を探す前に、神のイニシアティブ(主導権)が働いて、パウロにあらわれるのです。

ガラテア 1：15

「私を母の体内にあるときから私を選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに御子を私に示して・・・」

回心の主体はパウロではありません。イニシアティブは神にあります。パウロの修行によって勝ち得たものではありません。創造の時「神が言われた、するとその通りになった」とあるように、イニシアティブは神にあります。神が私たちをお呼びになり、私たちにご自分の御子を示してくださいます。「神がそう望まれるから」というのが「どのようにして？」の答えです。

ダマスコの出来事は、全ての民に神のあわれみがあらわれるためでした。パウロのためではなく、
彼を通して示される神の計画があらわされるためでした。また、私たちを通して神の計画が示されます。

私たち自身への問い

私の体験の中に、パウロに近いもの、似ているものがあるでしょうか？ 私を今ある私にしてくれた摂理的な神の働きを思い出せるでしょうか？

パウロにとって神のあわれみの啓示であったイエスは、私にどのようにあらわれてくれたのでしょうか？ 信仰生活の拠り所でしょうか？ 何かにこだわるのが、神のイニシアティブを邪魔していないのでしょうか？ 時間をかけてこれらの問いに答えていきましょう。

神の愛に気づき、その働きを感じ始めると、パウロの回心の歩みも身近なものとして受け入れられるでしょう。 同じ神様が私にも働きかけていることに気づくでしょう。

I テモテ 1：15a

「キリスト・イエスは、罪びとを救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します」

全ての罪の根は、神を神として認めないこと、自らを神の賜物として認めないことです。パウロは、善いものに執着することで、神に逆らう態度で生きていました。自分に注がれる神のいつくしみを拒んで生きていました。私たちも、神を神として認められない無能さを宿しています。

I テモテ 1：15b～16

「私は罪びとのなかで最たる者です。しかし私が憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずその私に限りない忍耐をお示しになり、私がこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。」

全ての人にとって、歴史にとって、世界にとって神のあわれみのしるしであったパウロ。このパウロを霊操して、私に永遠の命を与える神を知る。それが今回の黙想の目的です。

振り返りの質問

Q. 私が後生大事に守っているものは何でしょうか？ それは、自分の才能・努力でしょうか？

Q.パウロのように神様から赦され、同時に使命を託されたことがあるでしょうか？

Q.私に働く神のイニシアティブ（主導権）とは何でしょうか？

第2講話 13：00～13：50

3. 人間パウロの闇

この黙想では、ダマスコの出来事の一面、回心の直後に起きた「盲目」を深めましょう。闇のときを生きるパウロの「闇」を考えます。テーマは「改悛」です。開かれた心でこのテーマに取り組みましょう。

これまでパウロの回心を「啓示と照らし」で考えました。今回は、なぜパウロは「回心」の後「盲目」になったのか問います。「闇」の事実は、使徒書の中で強調されています。

使徒書9：8～9

サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

キリストの照らしは、パウロを喜びと光で満たす代わりに彼を打ちのめした。目が見えず、食事
もできない状態にします。人に手を引いてもらわなければなりません。

使徒書22：11～13

「私は、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれてダマスコに入りました。」・・・そして、アナニアが「兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい」と言って近づいた時、視力を回復しました。

聖書では盲目は、罪とか人間の迷い、方向を見失ってよろめく状態と関係付けられています。一つの罰でもあります。「盲目」を2つの側面から考えます。

1. 神の輝きの反映としての盲目

「人は死ぬことなしに神を見ることができない」という主題が聖書によく出てきます。神を見ることは光に違いないですが、人間にとって恐怖でもあります。光に出会うと、自分が「闇」の中にいることに気づかされます。光である神に触れることで人間は「闇」を認めるようになります。このようにしてパウロは、これまで歩むことがなかった「改悛の道」を生きるようになりました。盲目はパウロに示された神の栄光のネガティブな反映です。光り輝くキリストのみ顔と出会うことで、私たちは「闇」を自覚します。

2. 改悛の歩みとしての盲目

盲目になることで、パウロはこの世の罪にあずかり、罪深い人類の中に組み入れられます。罪はいつも私たち一人一人の中で待ち伏せしています。この「闇」は、神の力によってだけ打ち負かすことができます。しかし、神がいつも勝ち続けてくださらないと、いつでも「闇」が浮かび上がってきます。私たちが神の力を拒んだり、おろそかにすると、パウロが罪の権化と呼んでいるものが現れて支配してしまいます。

「闇」は、抽象的なものではなく、実際に私たちの心のうちにいつも待ち伏せしています。振り返ったら様々な悲しい過去が思い出されるでしょう。待ち伏せしていたものが、予期しなかった形で現実起きてしまいます。

パウロの手紙の中で、私たちに語ってくれる「闇」とか「暗さ」はどのようなものでしょうか？3つの側面から考えます。

社会的罪

ローマ 1：28～31

彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲です。

これは21のネガティブな罪のリストです。彼の時代の出来事や社会の現実の描写です。この罪のリストで取り上げられているのは、社会的罪です。隣人との関わりに関する罪です。当時の人々も、今の私たちと同じように「自分たちは教養・文化・権利・法律をもっている」と自負していました。

「自分たちは野蛮人に比べて優れていると」自惚れていました。パウロは「実はあなたたちは色々な腐敗・危険さらされている貧しい人間に過ぎない」と悟らせようとしていました。

パウロは、自分自身にも同じ根があることを心得ています。

「中から、つまり人間の心から悪い思いが出てくる」（マルコ 7：21～22）というイエスの言葉をパウロもよく理解していました。恵まれた立場にいる人の心からも悪い思いが出てくるのです。

ローマのクレメンスは「パウロは妬みによって殺された」と書いています。迫害や異邦人の悪意ではなく、パウロをライバルと思っていた人たちが彼を告発したのです。ということは、キリスト者の共同体も嫉妬の感情から無縁ではなかったことになります。嫉妬にかられた者たちが、自分の思い通りにならないパウロを、異邦人を利用して殺してしまいました。迫害を推し進めたのは確かに異邦人の権威者でした。しかし、もしキリスト者がもっと一致していたらパウロはあれほどのことにはならなかったでしょう。

ペトロの死さえも、そねみやそしり、あるいはユダヤ人キリスト者たちと敵対する信徒グループからの圧力が関係しています。

悪のリストは、私たちの日常体験に近いものです。警戒を怠ったら、自分たちに潜む悪がもたげてきます。神の光を見失わないように、注意し続けなければなりません。

司祭であっても、警戒を怠り始め、習慣の力でなんとか生きていけると考えるならば、パウロが描くネガティブな力に押され、倒れてしまうことになります。

根源的な罪のレベル

ローマ 1：28

「彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。」

これは根源的な罪の1つの有様です。自分たちの力に、過剰な魅力を感じてしまいます。神の力に依り頼まない限り、この種の罪に打ち勝つことはできません。

根源的な罪とは何でしょう？ 本質的には神を神として認めようとしません。サタンの謀叛の根源にある罪です。神に聴き従うことでしか真の生き方は全うできません。

根源的な罪とは、盗みや不義、偽りを選んでしまうのは悪への傾きではありません。「罪」は、神に聴き従う必要はない、自分の生き方を決定するのは神のことばではなく私たちの選択だ、とい

う思い上がりです。パウロの場合のように、熱意の外見をまとうこともあります。伝統や名誉を誇りながら、実際には自分の生き方を決定するもの神のあわれみを拒んでいました。

人間は自分に満足できないと、その不満が矛盾した異常な形態で外に現れてしまいます。自分に対する不満は、根をたどると愛されること、愛されるに任せることを拒むところにあります。その結果、悲哀や絶望の反応が生じ、人間の悪の極み、残酷や不義が生じます。自分に満足していない人は、他者に対して残忍に振舞います。歴史の中（ヒトラーの収容所など）で、過去ばかりでなく今も起こっている大虐殺は、神を悪魔的に拒んでしまったとしか説明が付きません。

パウロが、根源的な罪について話すとき、私たちは狼狽してしまいます。

ローマ 7：14～19

「私たちは、律法が靈的なものであると知っています。しかし、私は肉の人であり、罪に売り渡されています。私は、自分のしていることがわかりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行なっているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行なっているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。私は、自分のうちには、つまり私の肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。私は自分の望む善を行わず、望まない悪を行なっている。」

これが人間の無力さです。不合理に思えるほど矛盾しています。乗り越えなければいけない出来事を前に、自分にこだわり、自己防衛にあくせくし、神に依り頼むことを拒んでしまいます。最悪の場合、神の超越性を否定し、自分がすべての主役になろうとします。パウロは「私の中に住んでいる罪」という表現で、人間の底知れない惨めさに言及しています。

構造的な罪のレベル

人間は神が差し出してくださる救いに気づかないと、悪を知ることはできません。悪を知ることは、現実生活にあって真実に即して判断する助けになります。悪だけを見て、悲観してはなりません。構造的な罪が私たちをどう巻き込むか？ イエスの生涯の1つの例がよく説明してくれます。受難の前に起きたエピソードです。

マルコ 14：3～6

イエスがベタニアで、らい病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。すると、ある人々が憤慨して互いに言った。「何のために香油をこんなに無駄にするのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そし

て、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。」

ここで問題になっているのは、1つの行為の判断です。イエスと女性が孤立していて、それを取り囲む人たちが女性の行為を非難しています。彼女の真意を理解できません。不理解は人から人へと伝染し、女性の預言的な意味を持つ行為に気づけません。「多数が正義」という思い込みです。一般の理解、共通の常識、と思われることに基づいてイエスに反対し、孤独に追いやります。

盲目になったパウロは「多数が正義」という世界から切り離されます。普通、人が与えられるレベルをはるかに超えてパウロは「闇」を体験しました。そのことで、キリストの光、自分を新たにする光が浮かび上がりました。「闇」を経験して、洗礼の照らしの力を感しました。その時パウロは、アナニアの手を通して洗礼の恵みを受け、救いの力をいただきました。

振り返りの質問

Q.キリストの光を見てパウロは自分の「闇」を自覚しました。あなたにも似た体験があるでしょうか？

Q.私たちを取り巻く環境にはどのような「悪」が働いているのでしょうか？ 興味本位な記事や噂話、垂れ流される情報に流されていないのでしょうか？ 一人でも真実を追い続けているのでしょうか？ 時間やエネルギーをどう使っているのでしょうか？

4. 回心と幻滅

ダマスコの出来事から10年くらいの間、パウロがどう生きたか振り返ってみましょう。ダマスコのイエスとの出会いが紀元34~35年に起きたとすると、紀元45ないし46年に、パウロは初めて宣教に成功するキプロス島と小アジアに赴きました。それまでの10年は、あまり日の目を見ない困難な時期でした。

パウロは、この間のことをあまり語りません。多分、羞恥心からです。この時期のことを書くと、彼を受け入れた共同体にとって不快なことに触れざるを得ないからです。それでも、行間に苦しかったことを読み取れる記事があります。パウロが筆をとったのは、ダマスコの出来事から13~14年後、かつてあらわれたキリストの秘義が円熟してからです。この間、パウロに何が起きたのでしょうか。パウロの歩みは、回心を深める苦しいけれども建設的な歩みのモデルです。

パウロが自分の身に何が起きているのか理解できなかった苦しい時も、主は彼を見捨てませんでした。パウロが任務を捨てようとしていたかもしれないその時、主はいつくしみをもってパウロにあらわれてくださいました。私たちにも、あなたのあわれみを示してください。私たちが信頼をもってあなたの導きを受け入れ、それぞれの立場（信徒・シスター・司祭）で見舞われる出来事の摂理的な意味を悟れるようにしてください。聖霊の働き、マリアと諸聖人の取り次ぎによって、この恵みをお与えください。アーメン

使徒書 9：19~31

「サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐあちこちの会堂で「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。そこで、サウロの弟子たちは、夜の間、彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

テキストにはそのような意図はありませんが、少し意地悪く言えば、パウロがタルソスに旅立つと教会は平和になったことがわかります。騒ぎや混乱のもとになる人物がいなくなったからです。

歴史的事実

回心の後、実際何が起きたのでしょうか？ 回心の後、パウロは宣教を始めます。ずっとダマスコにとどまっていたわけではないようです。ガラテヤ 1:15~2:1では、アラビア滞在に触れていますが、そこでは彼は喜ばれていませんでした。やがてダマスコの権威者たちは、パウロの存在が気になりだし、敵意を持ち始めたので、とうとう逃げ出さなければならなくなりました。共同体が彼を支えたしたとも、非難したとも書いてません。パウロの熱意は賞賛に値しても、所詮混乱の元でしかなかったのです。

この逃亡の後、パウロがダマスコに戻ったのかどこにも記録がありません。エルサレムでも同じようなことが起こります。パウロの説教はだんだんと人目を引くようになり、兄弟たちは彼のことを心配し始め、故郷に帰るように計らいます。しかし、言い換えれば体よく礼を言って送り帰したのです。

ダマスコとエルサレムの出来事の後、故郷で孤独と失意の日々が続きます。手紙では、ダマスコでの最初のイエスの出現の延長とも言える、**偉大な示幻（第三天の幻 II コリ 12:1~5）**でこの時期が締めくくられています。パウロは神の栄光に再び接したのです。パウロはおそらく、最初の啓示（ダマスコでイエスがあらわれたこと）を疑う誘惑にさらされていましたが、偉大な示幻に触れ、孤独と挫折の時期を乗り越え生まれ変わります。

最初の回心からの10年をまとめると、過激すぎる宣教方法や、危険に身をさらすことが災いした困難にであり、衝突し当惑した歳月だったと言えるでしょう。孤独、沈黙、失意の時期でした。

こうなった理由

この間、パウロの気持ちが緩んだところがあったのでしょうか？ それとも彼に敵意を示す人たちがパウロを評価せず一方的に厄介払いしたのでしょうか？ おそらく双方に過ちがあったのでしょう。

パウロは、今問われたら、自身の至らなさを告白するでしょう。ダマスコの出来事は、すべてが新たにされる強烈な体験でした。けれども、日常生活に戻れば、パウロも相変わらずの自分に直面します。パウロは新しい使命に以前と同じ情熱をもって打ち込みました。むかし他のことに傾けていた熱意を新しいことに注ぎましたが、依然として自分から出たものかのように仕事に熱中したのです。そこで、主は浄化の厳しい試練に彼を襲うのを許されました。回心は活動の対象を変えさせたのではなく、新しい生き方、新しいものの見方を生むためでした。人格が統合されるまでには、ゆっくりと苦しみの中で自己放棄する必要があるのを学ばせるためです。パウロは、新しい使命を受けましたが、行動の仕方は以前のままのものが残っていました。

それぞれの立場で（司祭・シスター・信徒）自分の働きの動機を澄んだもの（み心にそったもの）にしたいと望んでいますが、状況によっては本能的に自分の考え方にこだわるものです。自分の何

かにこだわる姿勢は、絶え間ない清めを通して脱していきます。素晴らしいことを語る背後に、清めが必要なのです。

パウロに体験を聞く

あなたはこの10年間をどのように生きたのですか？ 孤独や、疎外される試練はあなたにとってどのようなものでしたか？

タルソスで、夕暮れ一人ぼっちで海岸を散歩しながら、相手となってくれる人もなく、ダマスコの道で思いを馳せていた時、あなたは何を考えていたのですか？ あなたがエルサレムで「全ては夢ではなかったか」と思うことはなかったのですか？

パウロは、そうした経験をした人が最初ではなかったことを思い出させてくれます。エジプトから追放され、自分の民族から忘れられたモーセも荒れ野で似た体験をしました。エリヤもすべての人から見捨てられたと感じて、孤独に打ちひしがれて荒れ野に逃げました。

自分の感情を語りながら、パウロはこう答えるでしょう。最初に感じたのは、確かに怒り、復讐、妬みでした。「こんな人たちのために自分の力と命を費やすのか」と腹立たしく感じました。心の平和を失い、神への恨みになりがちでした。「先の予定も立たず、タルソスのテント職人の店で閉じこもって働くはめに陥るなら、どうして主は私を呼ばれたのか？」「ダマスコでの出来事は一体なんだったのか？」合点がいかない気持ちもあったでしょう。理解しがたい神のなさり方にパウロは恨みさえ抱いていたかもしれません。

パウロがこのような時を経たと言っても、間違いはないでしょう。聖人たちは似た体験をくぐったのです。聖人の中でこのような内的苦悩を免れた人は誰もいません。パウロも同じでした。けれども神の恵みがパウロを潤します。憤りと恨みのあと反省が生まれ「もしかしたら、ここにも私のために神の摂理的な言葉があるかもしれない」という考えが生まれます。ヨブ記の一節にこうあります。きっとこのような言葉が薬のようにパウロの心に染み込んだことを思い描きましょう。

ヨブ記5：17～20

見よ、幸いなのは 神の懲らしめを受ける人。全能者の戒めを拒んではならない。彼は傷つけても、包み 打っても、その御手で癒してくださる。六度苦難が襲っても、あなたを救い 七度襲っても災いあなたが触れないようにしてくださる。飢饉の時には死から 戦いの時には剣から助け出してくださる。

聖書を繰り返し読んでいたパウロは、神のみことばで癒されました。この時もみことばは、解放と慰めの薬の役割をしました。パウロは、改めてみことばに聞き入っているうちに、反省は照らし

になり、パウロは再びダマスコでの出会いで経験した光り輝く啓示の中に入っていました。彼の手紙に見られるように、2通りの仕方で啓示に入っていきます。

1つ目 終末論的（世界や人間の終わりから考える神学）な反省です。

I コリ 7：29～31

兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。

神の国はすべてを越え、すべての上にあるのに、自分は自分の計画にこだわっていたことに気づいたパウロは、執着のこもった自分の熱意を見直します。どんなに良いことでも、どんなに興味深いことでも過ぎ去っていきますが、主だけは残るのです。

2つ目は一種の照らしです。

この働きは神のもの、だから時と条件を決めるのも神だ、という照らしです。パウロにとって2度目の解脱が行われます。最初の離脱は、自分はファリサイ派であり、ヘブライ人の中のヘブライ人だという特権をかなぐり捨てた時でした。2番目の解脱で、パウロは誇れるものを失うこととなります。エルサレムの連中を上回る、説得力があり、炎のように熱弁を振るう使徒であることから解脱しなければなりません。

パウロは自分が持ち合わせたものはすべて大切であるけれど、この働きは主のものだということを試練を通して悟ります。人間は、ことが一定の仕方で進むように考えますが、その計画の舵を取っておられるのは主なのです。

I コリ 3：5～9

アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることとなります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。あなたがたはわたしの建物でもなく、神の建物なのです。

苦しい体験を経てパウロは、神は主であることを悟ります。また、自分の成功を脇に置いて、神のためによりふさわしい道具になることの大切さを知りました。

2段階目の離脱をするパウロにニュースが入ります。バルナバがタルソスに来て、アンティオキアに誕生した共同体の養成をして欲しい、とパウロに頼みました。使徒的活動の第2の時です。パ

ウロは、10年前の熱意から変化した新しい姿勢でこの宣教に取り組みます。神の神秘に満ちたご計画により、パウロは浄化の火をくぐる必要があったのです。

私たち自身への問い

タルソスに身を引いていた時期のパウロに質問したのち、今度は私たちの熱意は一体誰のためかと自問してみましょう。

熱意は使徒職で神に賭けることです。この問いに答えるのは困難です。熱意という言葉自体、何かを巻き込むものです。巻き込めば巻き込むほど、それだけ使徒職を自分のものにする危険が増えます。

正真正銘の熱意とは、自分のことは省みずに没頭して人を巻き込むものです。自分が排斥されようが、成果が実感できまいが、そういうことが落胆や荒みの原因になったりするはずがないものです。

問題が起きてしまうのは、私たちが自分自身を巻き込んでしまうことです。私たちは、時には痛い仕方で触れられるのでなければ、神のわざがあらわれません。けれども、摂理が厳しい形で待っていても、それは決して私たちを責めるためではないのです。神は、密かにいつくしみを用意されています。もし、パウロが試練を経なければならなかったのなら、私たちも同様です。もし、パウロが自分の使徒職のイメージに引きずられてしまったのなら、私たちにも同じことが起きるでしょう。厳しいことが起きた時こそ、摂理的な時で、神の秘義のベールが取り除かれる時、ダマスコでパウロにキリストがあらわれる時です。

私たちに求められるのは、傷つかない者になるということではなく、神のあわれみ深い計画に目を開くことです。パウロにあわれみの道があったように、私たちにも神はあわれみの道を用意されています。私たちが使徒職に身を投じる時につきものの全ての困難には、あわれみに満ちた言葉あります。ヨブの「神は傷つけても癒される」という言葉です。

主は、私たちをいつくしみ、私たちを福音にふさわしい、内的に自由な奉仕者とするために清めてくださいます。

その恵みをマリアの取り次ぎによって願いましょう。

振り返りの質問

Q. 自分はあまり人の役には立っていないのでは？と「幻滅」に陥ったことはありますか？

正真正銘の熱意だったでしょうか？ 足りないところがあったでしょうか？

Q.今回の黙想会「パウロの回心」から何を感じたでしょうか？ これからの信仰生活、徳山教会での奉仕にどのような照らしがありましたか？

ゆるしの秘蹟の改善（長い告解 3つの告白）

教会は「罪」と「罰」をセットで考えるのではなく「罪」と「恵み」をセットで考えます。ゆるしの秘蹟は「罪の状態」「何かに囚われている状態」から「恵みの状態」に戻るためのものです。このゆるしの秘蹟、昔からの受け方に問題も感じてなくて、ゆるしが深く入っている人もいます。でも、うまくいかない、物足りなさを感じている人もいます。問題は2つ考えられます。①形式的になって効果を感じない ②秘蹟をうけた後、生活が変わらない。 この2点があります。

ある聖書学者は、2つの問題を解決するために「長い告解にしたらどうか？」と提案しています。長い告解と言うのは、告解を3つ「感謝の告白」「生活の告白」「信仰の告白」に分ける仕方です。

感謝の告白

ゆるしの秘蹟の問題点は、気が重くなることです。「自分のどこがまずかったか？」「何を怠ってしまったのか？」と考え始めると、気がめいってきます。「これだけ頑張ってるのに、神様はさらに要求されるのか？」と身構えてしまう人もいるかもしれません。そうではなくて、ゆるしの秘蹟の最初は、「神様への賛美・感謝」から始めます。「私の人生に神様がどう関わって下さったか？」最近、神様がどう私を助けたり励ましたりして下さったのか、を振り返ります。感謝も賛美も全くないという方は、特別苦しい状態か、神様からの恩を何も感じなくなっているので神父さんに相談して下さい。でも、多くの方は感謝することを見つけられると思うので、ゆるしの秘蹟を「賛美と感謝の告白」から始めて見て下さい。

生活の告白

続いては「生活の告白」です。日頃の生活の中で重荷になっていること「自分はダメだ」とか縛っているくびきを話します。心に重くのしかかっていることに、自分の弱さや至らなさも絡んでいたらそのことをありのままに打ち明けましょう。私たちは、くびきに縛られて「恵み」から離れて「罪の状態」に陥ってしまいます。神様は、ゆるしの秘蹟を通して私たちを自由にしようとされていますが、この苦しい部分があるままだとゆるしの秘蹟を受けても生活は変わりません。「罪」に陥り「恵み」から離れるには、人によって大体パターンがあります。たとえば、「人と同じことをしてないとダメ」とか「完璧でないとダメ」とか、このようなくびきに知らず知らず縛られていきます。無気力になって前に進めなくなります。そこから脱するには「妨げ」と「助け」を見分けることが鍵になります。「妨げ」は「やらないとダメだという使命感」かもしれません。あるいは「自己はいくら頑張ってもこの程度」という投げやりな気持ちかもしれません。では、反対の「助け」がある

でしょうか？ 幼稚園で働く私にとっての「助け」、前に進ませてくれるのは、子どもたちの柔らかくて小さな手です。「一緒に遊ぼう！」「一緒にご飯食べよう！」と誘ってくれる小さな手です。その感触を思い出すと「自分はダメだとか」という縛りから解かれて「もう少しやってみようか！」という気持ちになります。「助け」をよく見て「妨げ」を脇にやることです。

信仰の告白

最後は「信仰の告白」です。「神様、私はこんなに弱いですが、どうか受け入れて下さい。あなたに最後までついていきたいのです。どうか私を自由にして下さい」と神様に願います。

ゆるしの秘跡のモデルは、放蕩息子のたとえ話にあると言われています。家で待つお父さんは、まだ遠くにいる息子を見つけてゆるして、祝宴までしました。同じように神様は、初めから私たちをゆるすと決めていらっしゃる。神様は、私たちが心の重荷から解かれて自由になることを願っています。ゆるしの秘跡を授ける司祭も、みなさんが神様の励まし、あわれみ深さを感じ直して、生活が変わることを願っています。